



二
月

パストラル尼崎

如
月

No106.2021(R3)年1月25日

〔編集・発行〕

パストラル尼崎

尼崎市潮江1丁目10-2

Tel.06-6493-0521

Fax.06-6493-0301

発行責任者：山本 弘樹

◆二月の歳時記◆

「ふぐ料理」によせて

伊東博文と高杉晋作



春帆楼

寒い冬、温めの「ひれ酒」を飲みながら「てっちり」や「てつさ」に舌鼓を打つ・・・なんてホント贅沢ですよ。でもご存知のように、この「ふぐ」。ちようちゃんにもなる愛嬌ある姿とは相反し、猛毒を持つ事でも有名です。大阪での「てつぽう」にあたれば死ぬや、長崎県島原の「ガンバ」棺桶などと呼ばれる所以でもあります。中には食通とか美食家と称し、「ふぐの毒でピリピリ痺れながら酒を飲むのが通」などと板前にせがむ輩もいるのだとか・・・何年か前に歌舞伎役者の坂東Mさんや、お相撲さんなども、危険を承知で肝を食し命を落としています。

さて、この美味で危険な「ふぐ」は、いつから食されるようになったのでしょうか？ 実はその歴史はとても古く、縄文時代の貝塚からふぐの骨が見つかっています。石の包丁で調理なんてまさしく命がけ・・・しかし命知らずの我らが御先祖様（汗）がその後も食べ続けた「ふぐ」は、秀吉の時代、朝鮮出兵の為に九州に集結した多くの武士がフグで中毒死し、とうとう禁止令が出ます。江戸時代になっても多くの藩が禁止し、特に「ふぐ」で有名な下関を擁する「長州藩」では、家禄没収などの厳罰もありました。

しかし、その「ふぐ」に救世主が現れます。実は、武士社会では罰則がありましたが、庶民たちはチャッカリ「ふぐ」を食していたのです。

頃は明治二〇年。内閣総理大臣だった伊藤博文が、馴染みの宿、山口県「春帆楼」に宿泊した時の事。時化（しけ）で魚が取れず、困ったおかみは『打ち首』覚悟で「ふぐ」を伊藤公に出します。実は若き日、高杉晋作らと「ふぐ」を食し、その味を知っていた伊藤公は、初めてのような顔をして「こりゃあ美味い！」と大絶賛。（役者ですね笑）翌明治二十一年に、当時の山口県知事に命じて禁を解かせ、「春帆楼」はふぐ料理公許第一号として広く知られるようになりました。

124年ぶり・・・??

節分というと毎年2月3日ですよ。・・・が、しかし今年のカレンダーをよく見ると節分はなんと、“2月2日”。これはミスでも老眼のせいでもなく確かに2月2日となっています。汗

では何故そうなるかというと、“立春のすれ”による影響なのとか。立春の日がずれるのは閏年（うるうどし）と同じ感覚で、1年間を二十四節氣に当てはめて定期的な運用をしようとする、少しずつ誤差が生じます。それを調整した結果、今年は2月3日が立春に当たり、節分は1日前の2月2日になるのだとか。ちなみにこれは、明治30年以来、124年ぶりとのことだそうで、驚くのは当たり前ですよ。この驚きの「2月2日」の節分、来年に「2月3日」へ戻りますが、2025年から4年ごとに再び2月2日が続き、今世紀末にかけて頻度が増えていくとされています。何故そうなるかアカデミックに説明したいところですが（汗）紙面がないのでこれにて退散・・・（逃）



第1回「わたしたちの白地図」

1月のアクティビティ「わたしたちの白地図」が「鏡開き」のあと実施されました。現在パストラル尼崎のご入居者数138名。最近新しいご入居者も増えつつあり、本来なら交流の場を提供する中で、新たなコミュニティを作って頂きたい！と願うもコロナに阻まれ・・・泣

そんな制約の中、今回企画したのが「わたしたちの白地図」。皆様の歩んできた歴史を具象化し、少しでもお互いの理解や共有につながればと実施。ロビーに登場した大きな地図に「これ楽しみにしてた〜！」「お！面白いね〜」と早速、第1回の設問「わたしが住んだ場所」に次々とマグネットをつけていく皆様。それにしても、男性の圧倒的な参加率と関心の高さに驚きを隠せません。（嬉）

「ここは転勤でね〜」「ここに疎開してたのよ！」「エンジニアだったからね〜」「10代で戦地に・・・」など、北海道や九州そして海外まで、用意していたマグネットはすぐ底をつき、その日の内に補充する事に。汗

地図上のマグネット一つひとつに皆様の思い出が詰まっているのかと思うと、何だか感慨深いものが・・・それにしても10か所以上転勤を繰り返していた猛者もおられたり、まさに企業戦士そのもの！あらためて日本の高度経済成長を担われた皆様に感謝しつつ、その時のエピソードを語る表情が、羨むほど眩しく輝きを放っていたのが印象的でした・・・

次回は「わたしが旅した場所」です。

